

小学校カリキュラムの新たな構成に関する提案：
教育環境学の視点を踏まえた附属浜松小学校の実践
に関する考察に基づいて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野間, 正巳, 山崎, 保寿 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007338

小学校カリキュラムの新たな構成に関する提案

—教育環境学の視点を踏まえた附属浜松小学校の実践に関する考察に基づいて—

Proposition on the Construction of Curriculum for Elementary School : Consideration on the Practice
in Hamamatsu Elementary School Attached to Shizuoka University Based on the Viewpoint of
Educational Environment Studies

小野間 正巳 *
Masami ONOMA

山崎 保寿 **
Yasutoshi YAMAZAKI

（平成 24 年 10 月 4 日受理）

The purpose of this paper is to propose the construction of curriculum for developing children's ability to live in future by the consideration in Hamamatsu elementary school attached to Shizuoka University. The following matters became clear upon consideration and practical investigation. (1) In the Hamamatsu elementary school attached to the Department of Education, original curriculum has been carried out. That is "Subjects", "Integration" and "Creative School Life". The curriculum is structured around these learning in this school. (2) In three domains of curriculum, especially "Creative School Life" raised ability and autonomy in the children and created activities which match with the actual situation of the children. (3) The elements, contents and methods are proposed about these curriculum. These elements, contents and methods are important to develop curriculum domains based on the Based on the viewpoint of educational environment studies.

1 問題の所在と課題

現代の社会は、地域との連帯感が希薄でしかも多様な情報が氾濫し価値ある情報の判断が難しい社会である。さらに、グローバル化の進展により知識に国境がなく、今の知識が明日の知識とは言えず、競争と技術革新が絶え間なく生まれ変化する時代でもある。学校教育においては、社会の変化に対応するような知識や技術を身に付けさせるとともに、自然や文化と触れ合ったり、関わり合ったりする経験を積み重ねていくことで、子どもが新たな自分なりの知を更新していき、自分を成長させて生きていく生き方の基礎的な力を身に付けさせることが重要になっている。それは、今を生きる子どもたちが、自らが生きる未来を自らの力で拓くことができるようになることである。子どもたちにこのような力を身に付けさせるために、「未来を拓く力」を育てる教育が学校教育に求められている。

こうした考え方に立った教育の実現のためには、これまでの学校における実践を通して得られた知見を生かした新たなカリキュラムの開発が必要である。その際にカリキュラムは、学校

* 磐田市立長野小学校校長（前附属浜松小学校副校長）

** 共同大学院教科開発学専攻（前附属浜松小学校校長）

教育現場における実践を検証し、分析することで得られた知見を生かして、開発に取り組むことが有効である。そこで、本稿では、第一の課題として、これまで20年間にわたり静岡大学教育学部附属浜松小学校が継続して取り組んできたカリキュラムについての研究・実践を分析・検討・再編成することを通して、附属浜松小学校における実践内容の概略および検証した結果をもとに新たなカリキュラム内容の提案と実践に伴う今後の課題について考察する⁽¹⁾。第二の課題として、文部科学省の学習指導要領とは異なるカリキュラム領域によって実践している附属浜松小学校のカリキュラムの構成を提示し、これからの小学校カリキュラムのあり方を提案する。

2 附属浜松小学校におけるカリキュラム創造の歩み

2-1 「経験に開かれたカリキュラム」の趣旨とその意味

子どもは、対象「人・もの・こと」との直接的な関わりの中でそれらを体で感じながら、自らの動くままに働きかけ、また対象からの働きかけを受け取るという経験を日々の授業や生活の中で積み重ねていくことによって自らの内部に生きる力を育んでいる。こうした子どもの経験との関係を積み重ねて意味あるものにしていくカリキュラムを附属浜松小学校では、「経験に開かれたカリキュラム」と呼んでいる。そこでは、経験することをじっくり味わい意味付けることが可能な学習を組織し、子ども一人一人が対象と関わり自分らしい学びを積み重ね「学びの履歴」として経験していく。こうした学習を目指して学習対象と教師と子ども相互の間で展開したい願いを計画カリキュラムとして策定した。

そこで、附属浜松小学校では、「教科」「統合」「生活創造」の三つの領域を対象とした計画カリキュラムを用意し、それぞれが「文化価値」「生き方」「社会性」を経験として学ぶことを目標とした。そして、計画カリキュラムをもとに授業実践を行い、授業を通して子どもがどのような意味を形成したのか、子どもの学びを育てる経験の場として適していたのかを多面的な情報をもとに評価すること、すなわちアセスメントを行うことを通して、子どもの「学びの履歴」を明らかにしていくこととした。さらに、アセスメントによって得られた情報を授業改善に生かすとともに、実践カリキュラムとして記載し、次の計画カリキュラムに生かすことを大切にした授業実践を行っている。以下は、その骨子となる内容と方法として、計画カリキュラムの構成、アセスメントの方法、実践カリキュラムの内容について示すことにする。

(1) 計画カリキュラムの構成

カリキュラムの構成要素として考えられる単元構想・授業のデザイン、そして子どもたちに学習してほしい教科や領域などは教師が設定するが、それは、あくまで子どもの学習経験を導き、その価値を高めるためのものである。そのため、単元構想・授業のデザイン、枠組みなどの計画カリキュラムは、教師が子どもたちに学習してほしいと願う計画されたものとなる。しかも、上記の意味を踏まえカリキュラムは子どもの経験に対して開かれたものになっていることを趣旨とした。カリキュラムの構造は、次のように「教科」「統合」「生活創造」の領域から構成した。

まず、「教科」は、人類が過去から現在にわたって築き上げてきた文化遺産を対象とし、それと関わる中で、事実・真理についての認識を深め、自分なりにその価値を吟味し再構成させることによって、自分なりの文化の創造を目指すものである。そこで、「教科」の目標を次のようにした。

子どもたちが文化と出会い、からだを通して感じたことを表現したり、自分なりに社会的・文化的意味を形成したり、関わりの中で価値を受け入れたりして、自分なりの文化を創造する力を養う。

「教科」の学習として、国語・社会・算数・理科・音楽・図工・家庭・体育の8教科を設定した。「教科」の学習では、子どもたちが学習内容としての文化を社会的・文化的意味をもつものとしてとらえ、自らが文化の再創造に参加していく経験をするのが大切にされる。

次に、「統合」は、本校独自の学習領域であり、子ども自らが、自分を取り巻く人間や環境との関わりの中で生きていることを自覚し、様々な経験を繰り返すことによって生きることや生きていることについての意味を形成する領域である。また、この学習を通して、自らの生そのものに責任をもってよりよく生きようとする力を育てるものである。そこで、「統合」の目標を次のようにした。

身の回りに存在する様々な人・もの・ことと直接関わる活動や体験をもとに、学習を自分や自分の生活と結び付けることを通して、人間らしい生き方を探りながら、主体的に生きる力を養う。

「統合」の学習は、7つの〔学習領域〕をもとにして次の11の〔学習テーマ〕で構成される。
①学校生活への適応 ②季節感を味わう ③生物との触れあい ④ものを作る ⑤地域文化に触れる ⑥ボランティア活動をする ⑦食と文化の関わりを探索 ⑧自然と人間との関わりを見直す ⑨性差と役割について考える ⑩生命の大切さを考える ⑪自分史を作る。「統合」は、後に学習指導要領に総合的な学習の時間が創設されたため、内容を検討して、「総合」として附属浜松小学校のカリキュラムに継続されている。

そして、「生活創造」は、子ども自らの手で、自分たちの生活をより楽しく、豊かにしていく活動であり、そこで人間であることの社会的側面を学んでいく場である。社会的な存在としての人間には、他に対する責任が伴う。他に対して責任をもつとは自己中心性に固執したり、逆に社会規範に従順になって逃げたりしないということである。そこで、「生活創造」領域の目標を次のようにした。

自らの生活を自らの責任においてよりよいものにするために、学校生活の改善に取り組んだり、社会生活にも進んで関わったりすることにより、社会的存在としての自己を見つけ出す。

(2) アセスメントの方法

以上に示した「教科」「統合」「生活創造」の3領域において、アセスメントの方法を次のようにして実施した。

①授業者自身によるアセスメント

授業者自身によるアセスメントとして、「子どもの学びの事実をとらえる」とことと「授業リフレクションを行う」ことを取り入れた。「子どもの学びの事実をとらえる」とことは、授業者が子どもの自己評価や作品、子どもとのコミュニケーションなどをもとに、子どもの学びの事実を授業中の子どものからだのあらわれ・あらわし、関わりのありようを見てまわることとらえる。教師自身が感じる子どものあらわれのずれに着目しその意味するものを追求し解釈することで、変容をとらえその子の学びの真実に近づくことである。

「授業リフレクションを行う」とことは、授業後に、教師が子どもの学びで印象に残ったエピソードを思い起こし、授業中の子どもの姿や子どもの学ぶ姿から感じたことや子どもの活動などについて振り返ることでもある。

②複数の教師によるアセスメント

授業者自身によるアセスメントを補うものとして複数の教師が様々な立場で子どもの学びを

観察し、そこで見えたことを比較し検討することである。ここでは、教師が観察し、そこで見えたことを比較し検討するために、アセスメントの方法として、「対話リフレクション」と「授業ディスカッション」を取り入れた。ことである。ここで、「対話リフレクション」とは、授業記録したVTRを見ながら、抽出児の学びとそれに関わる子や気になる子の学びをどう見たのか、どう感じたのかを援助者の助けを得て振り返ることである。「授業ディスカッション」とは、授業参加者や行動観察者などがそれぞれの立場から授業において見えたことを出し合い、多面的な検討をすることである。

③ペアや集団による授業アセスメント

②と同様に、単元プランを考える時点から学年団教師や学年教師のペアで単元プランや授業プランを検討し、後述する付けたい4つの力や単元、授業の流れを見直していくこととする。授業をより多くの目で見ること、授業者の意図や願いがはっきり分かる授業であったか、授業者のおさえた子どもの姿が見られたかを話し合っている。教師は、授業終了後に自らが子どもの表れを見取ったり、自らが授業の流れ、子どもの反応などをアセスメントしたりすることで、次の授業の流れや一人一人の子どもに必要な方策を考えていくうえで必要なことである。また、このアセスメントをすることで、授業の流れはもちろん、単元の流れや教材などの位置付けが正しかったかが分かり、カリキュラムのアセスメントや修正・改善にもつなげていくことができる。

以上、①②③の多面的なアセスメントを行うことによって、次の学習への見通し情報としてのフィードフォワード情報をつかむことも可能であり、それを生かすことによって、子どもの学びに即した授業が改善・創造できるのである。このアセスメントは、予め決めた観点で客観的な評価をすることではなく「いま・ここ」で子どもが学んでいることを教師が見取り、子どもの行動を評価し、次の行動に見通しが持てるような情報を得ることである。そのために、日々の授業において、教師自身が一人で行う場合と授業研究において複数の教師で行う場合があり、それぞれの情報を関連させて、子どもの学びの内容を見取っていくこととしている。

(3) 実践カリキュラムの内容

アセスメントを行うことにより、「教科」や「統合」の学習における子どもの「学びの履歴」が明らかになり、これからの子どもの学習の方向をつかむことができ、授業の改善に生かすことができる内容をまとめていくことができる。これにより、教師自身が授業実践を通して感じたり、考えたりしたことをもとに、一層子どもの学びに近い内容のカリキュラムが記載されていく。こうした「学びの履歴」とその記録の蓄積を実践カリキュラムという。この実践カリキュラムは、教師と子どもたちによって創造された学習の実践事例である。同じ単元を実践する場合に計画カリキュラムを作る時の情報として提供される役目を持つことになる。

このようにして、実践した内容やアセスメントによる知見をまとめ、実践記録・ストーリーなどによる実践カリキュラムを作成する。このカリキュラムを生かした新たな計画カリキュラムを創り次の実践を行う。こうして、子どもたちの学びの広がり深まりが保障され、より子どもに沿った学びが展開されることとなる。学びの履歴を元に新たな計画カリキュラムを創ることが実践カリキュラムの趣旨として目指されている。

(4) モジュールの運用と時数管理

附属浜松小学校における教科・総合・生活創造の年間授業時数については、学習指導要領を踏まえて、配当時数の改善・修正を繰り返し行ってきた。その中で、基礎的・基本的な知識・

技能と思考力・判断力・表現力のバランスよく伸ばしていくために、特に教科の時数の確保に努めた。その際、子どもが、自らの思いや願いを大切にしながら、学習に取り組むことができるように留意した。そのために、モジュールの運用を行った。15分間を1つの単位とし「15分間＝1モジュール（1単位時間45分間は3モジュール）」とし、4モジュール（60分間）や7モジュール（105分間）などの活動を可能とした。

この結果、生活リズムの調整だけでなく、火・水・木の朝は、1モジュールの授業を行い、漢字の習得、計算練習、表現活動、読書などに取り組むことが可能なり一人一人の子どもの学びを保障している。なお、モジュールの運用に当たっては、計画的な運用と時数管理に留意した。年間プラン、単元プラン、授業プラン作成の時点でモジュールのための目的を明らかにして取り組んだ。また、教員一人一人がモジュール表を活用した時数管理を行うとともに修正・改善を行ってきた⁽²⁾。

3 新たな附属浜松小学校のカリキュラム～4つの力と浜松小3領域～

(1) 附属浜松小学校の新たなカリキュラムと能力系統表

附属浜松小学校では、学びとは、子ども自身が周囲の文化環境と能動的に関わることによって、自分にとっての意味を見出し、その意味を吟味し再構成して自分なりの意味を形成していくプロセスであると考えてきた。そして、子どもは、身の回りの世界や文化に関わるという経験を通して、これまでの文化を問い直し、自らの新たな文化を創造していく学習の主体者であ

表1. 資質能力系統表

学習活動を支え、広げる資質・能力系統表			
	低学年	中学年	高学年
感じる	身の回りの世界や文化のよさや美しさを直感で受け止め、楽しむことができる。	身の回りの世界や文化のよさや美しさを直感で受け止め、楽しむことができる。	身の回りの世界や文化のよさや美しさを直感で受け止め、楽しむことができる。
表す	感じたことや考えたことを言葉や図画などで表現する。	感じたことや考えたことを言葉や図画などで表現する。	感じたことや考えたことを言葉や図画などで表現する。
見出す	自分や他者の考えや考えのよさを認め、学ぶ。	自分や他者の考えや考えのよさを認め、学ぶ。	自分や他者の考えや考えのよさを認め、学ぶ。
調べる	自分の疑問や疑問の解決のために必要な情報を調べ、整理・分析する。	自分の疑問や疑問の解決のために必要な情報を調べ、整理・分析する。	自分の疑問や疑問の解決のために必要な情報を調べ、整理・分析する。
かかわる	自分以外の存在や文化の考えを受け入れ、共有・交流する。	自分以外の存在や文化の考えを受け入れ、共有・交流する。	自分以外の存在や文化の考えを受け入れ、共有・交流する。
ふりかえる	自分の学習や活動の振り返りを行い、学びの成果や課題を整理・整理する。	自分の学習や活動の振り返りを行い、学びの成果や課題を整理・整理する。	自分の学習や活動の振り返りを行い、学びの成果や課題を整理・整理する。

※この表は、実践を基盤として作成されたものであり、厳密な意味での評価・改善を要するものである。

(静岡大学教育学部附属浜松小学校『学校でカリキュラムをつくる』静岡教育出版、2004年3月より)

り、学びは、教師がさせることによって成立するものではなく、子ども自らが主体的に学習対象に取り組むことによって成立するものであるとの結論を得た。したがって、こうした学びは、子どもが受け身で行っているという感覚ではなく、自らの意志で学びに取り組むことが重視されている。

このような考え方に立ち、「経験に開かれたカリキュラム」によるこれまで15年間の実践の検証とそこで得られた知見を基にした「経験に開かれたカリキュラム」の再定義と新たな視点に基づいたカリキュラム編成を行った。このカリキュラム編成では、子ども主体の学習がなされ、学習経験を積み重ねていく枠組みを創り出すことが可能なカリキュラムを編成するようにした。その際に、子ども一人一人が学習経験を積み重ねていく中で学びにとってほしい価値や付けてほしい資質などを盛り込んだ「単元構想」や「授業計画」を用意した。こうした予め計画したプランを参考としながら子ども一人一人が学習を経験することで、子どもが、どんな力を付けていけばよいか、どんな順序で学んでいけばよいかを子どもの実態を見取って評価し、各領域で検討してカリキュラムの有効性を明らかにしてきた。

そして、各領域において自律性、関係性、有能さの3つの資質と「感じる、見通す、追究する、表現する」の4つの力がどのように関連的に身に付いていくのかを考察した。その際に、評価（C：Check）→改善（A：Action）→計画（P：Plan）→実践（D：Do）のサイクルに基づいて「計画的なカリキュラムの作成→実践・評価→実践的なカリキュラム→計画的なカリキュラムの作成」という実践研究を積み重ねた。その結果、4つの各力について、その学年段階に応じた能力系統が、表1のように、子どもの学習活動を支え、広げる資質・能力系統表として体系化された。

(2) カリキュラムの構造

子どもは、日々の学びを積み重ねていくことで発達段階に応じた課題を自らの力で解決し成長していく。そのため、6年間の学びの段階を考慮したカリキュラムを創造していくために、小学校生活の6年間という時間軸を低学年・中学年・高学年の三期として、2年間続きの学びの段階と考えて各領域における学びの系統を構成した。この6年間の学びの段階では、自律性、関係性、有能さの3つの資質や「感じる、見通す、追究する、表現する」の4つの力を各領域において具体的にしていくことが重視された。この計画カリキュラムは、授業が進むことで常に修正・改善が図られるようになっている。

(3) 単元・授業プランの構成要素

単元プランの作成に当たっては、まず目の前の子どもの実態をつかむこと（C）が必要である。子どもの実態を把握した教師が、今、どんな力を子どもに付けるかを判断し、意図や願いをもって教材を選び、教師自身がその教材をしっかり理解し、豊かな学びにするための方策を考え子どもに合ったプランを作成する（A）。次に単元の流れを考え（P）、単元プランで考えたものを実際授業で行う（D）。さらに、授業を通して子どもの学びを評価することが、再びCを行うことになり、単元の流れや方策に修正・改善が加えられていく。このようにC→A→P→Dを繰り返すことで、子どもの学びが豊かさを増し、それが繰り返され、4つの付けたい力を身に付けていくことができる。

この単元プランの中心には、「感じる力、表現する力、見通す力、追究する力」の4つの付けたい力を置き、子どもの実態、教師の意図や願い、教材、方策などと関連付けた。これら、4つの力は、目の前の子どもの実態から考えることもあれば、教師の意図や願いから考えてい

くこともある。単元プランも「4つの付けたい力」をはじめ「子どもの実態」「教師の意図や願い」「教材」「方策」「目標」の6つの要素と単元の流れが常に絡み合い、つながりをもたせるようになっている。

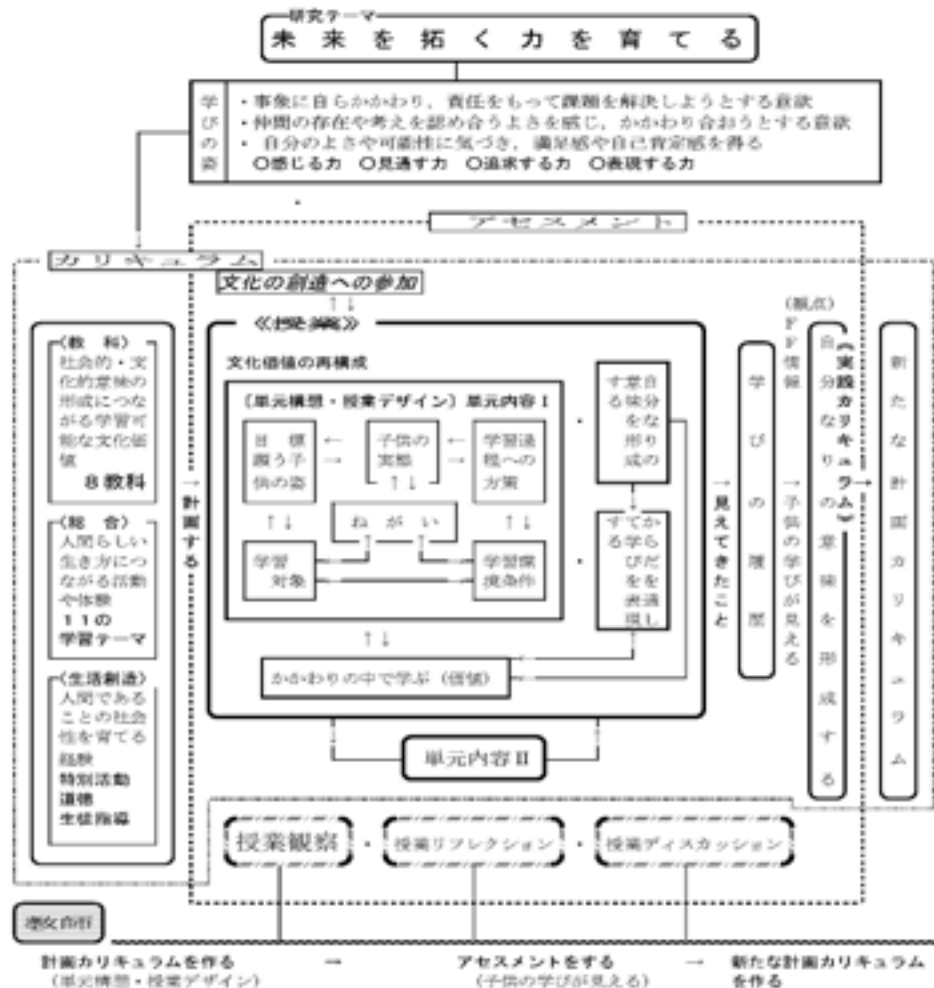


図1. 単元・授業プランの構成要素とカリキュラムの構造 (小野間作成)

(4) 単元・授業プランの作成

単元の流れでは、学習活動、教師の方策、評価規準が重要な位置を占める。特に、評価規準は、本時の目標に向かって取り組んでいる子どもの姿を表しており、それが、授業後の評価に生かされるようになっている。単元や授業を実施した際には、教師が子どもの個の特性や学びに着目して構想し、単元や1時間の授業を通して、子どもが主体的に学び、学ぶことへの喜びを教師と共に感じていることの有様を振り返って評価していく必要がある。そのためには、単元や授業の流れを見直したり目標や活動内容を見直したりして修正・改善していく必要がある。その際、子どもの反応や授業の流れによって、教材の解釈をし直したり、目標を変更したりすることが大切であり、一般的なP→D→C→Aの流れではなく、C→A→P→Dサイクルの考え方を採用している。常に授業は、今行われていることを評価することから見ていくことで、子ども一人一人の反応や学びの実態を単元・授業の進め方に反映できるからである。

そこで、子ども自身が目標を設定し、その学びを自ら振り返っていくと共に、教師が子どもの振り返りをチェックしたり、多くの目で個の学びを評価したりすることで、「自分の課題と

して学びに責任を感じる姿」「仲間と認め合いながら学ぶよさを感じる姿」「自分のよさを感じ、次の課題へとつながる姿」が見られたかを評価する。また、単元や授業の流れを評価し振り返ることで、単元や授業の流れを修正・改善し、カリキュラムにもどり見直すことで、カリキュラムの修正・改善にもつながっていくと考える。

4 本研究に基づく提案～これからの小学校カリキュラム～

(1) 実践の整理とカリキュラムの方向

平成8年度から始まった附属浜松小学校のカリキュラムは、研究期間毎の修正改善を重ね、現在までに次図のような変遷をたどることとなった。こうした実践カリキュラムにより、身の回りの事象のよさや美しさを敏感に受け止める感じる力⁽³⁾、感じたり、考えたりしたことを相手に伝わるように言語や体を使って表す表現する力⁽⁴⁾、疑問や課題を見つけ出し、よりの確に課題をつかみ、より計画的に問題解決をする見通す力⁽⁵⁾、事象に積極的に関わり、情報を集め・理解し、検討し、解決する追究する力⁽⁶⁾を育てることで「未来を拓く力」が育つと考えられる。この「生きる力」へのとらえは、国立教育政策研究所による「教育課程の編成に関する基礎的研究」で示す「思考力や判断力、言語力」「道徳性や人間関係能力、社会性、コミュニケーション能力」「シチズンシップや市民性」「キャリア発達を促す能力」の意味するところと同様である。

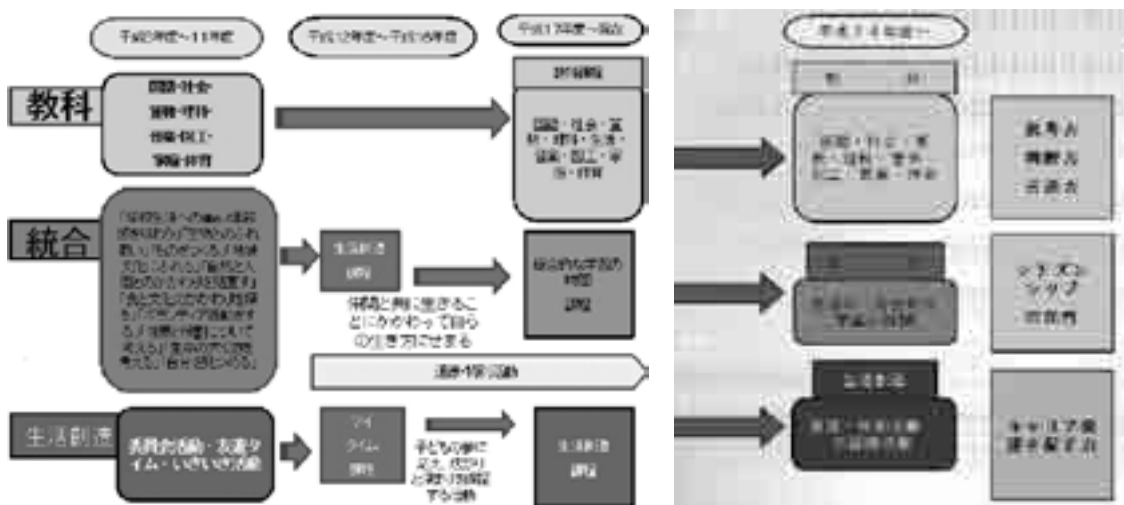


図2. 実践の整理とカリキュラムの方向（小野間作成）

(2) 4つの力を支える基礎的な資質

本稿で示したカリキュラムは、学びを豊かにしていくために子どもに付けたい力を「未来を拓く力で身に付けたい態度と資質」「子どもの実態」などから「感じる力、表現する力、見通す力、追究する力」の4つの力として系統立てたカリキュラムである。学びを豊かにすることは、学びを人ごとではなく、自分にとって身近で切実なものとして感じることである。受け身の学習ではなく、自らの意志で学びに取り組む学習である。そのためには、以下に示すように、自律性、関係性、有能感の3つの資質を育てていくことが重要になる。

自律性：事象に自ら関わり、責任をもって課題を解決しようとする意欲。子ども自らが感じることを大切にしていくことで、子ども自身が認められていることに気づき、感じたことをさらにふくらめていき、自分の思いや考えをもつ。子どもがもった思いや考えから自分で追究し

たい課題を決め、自分で課題を解決しようとすることで、自分の学びに責任をもつようになり、自律性が育まれていく。そして、課題を達成できたという満足感を得ることで、次の課題が見つかった時にも主体的に事象に関わり合おうとし、それを解決していこうと意欲をもって取り組んでいくことができる。

関係性：仲間の存在や考えを認め合うよさを感じ、関わり合おうとする意欲。仲間から影響を受け、自分の思いや考えが変化したり、深まったりすることで、自らの課題を解決するとともに考えを確かなものにしていく。また、自分の考えが相手の考えを変えたり、深めたりすることができたと感じた子どもは、お互いに高め合う学びを喜びと感ずるであろう。こうして、子どもは、仲間と関わりながら学ぶことを必要とするようになる。

有能感：自分のよさや可能性に気づき、満足感や自己肯定感を得ること。事象と直接関わり合ったり、触れ合ったりしながら、自律性を感じる学びを保証されていると感じた子どもは、安心して自分の学びを深めていく。そして、自分自身の課題を粘り強く追究し、解決することができたときに満足感を感じ、自分の有能さを感じるようになる。さらに、仲間の考えを認め合いながら学びを進めていくことで、自分自身の学びはさらに高まり、自己肯定感を味わうことができる。

(3) 4つの力の育成とカリキュラムの研究領域としての教育環境学

以上に示した自律性、関係性、有能さを感じる資質を高めながら、「感じる力、表現する力、見通す力、追究する力」の4つの力を付けていくことで、子どもは、未来を拓き、生きるために知識・技能を身に付けるだけではなく、先人たちの願いや探究の結果として生まれてきた文化価値を自分なりに再構成し、自らの責任をもってよりよく生きようとする生き方を形成し、社会的存在としての自己を見つけ出す社会性を形成していくことができる。

また、以上に示した「生活創造」をはじめとするカリキュラム領域は、教育環境学の研究対象として分析・考察するに相応しいものである。教育環境学は、愛知教育大学と静岡大学の共同教科開発学専攻（後期3年のみの博士課程）における一分野である。平成24年度から開設された同専攻は、教科専門・教科教育・教職専門の専門性の枠を越えて、学校教育が抱える複雑・多様化した諸課題に対応した研究を遂行していくことを目的としている⁽⁷⁾。同専攻は、教科専門と教科教育を融合・発展させた教科学と、教職専門を発展させた教育環境学とで体系化されている。本研究が立脚点とする教育環境学は、教科内容として構成されたカリキュラムを実践するための教育環境の研究を主とする学問分野である。「教科」、「総合」、「生活創造」の関係およびそれらの内容について、学校や子どもたちを取り巻く環境を視野に入れ、教育論・教育内容論・教材論などの観点から分析していくことが重要になる。

なお、本研究の主旨は、下記の研究大会で発表した。

小野間正巳・山崎保寿「教科、統合、生活創造による学校カリキュラムの構成に関する研究」日本教育方法学会第46回大会、2010年10月9日、於国士舘大学

小野間正巳「生活科と総合的な学習の時間を連続させたカリキュラムの開発」日本生活科・総合的な学習学会第20回岐阜大会 2011年6月18日、於岐阜聖徳学園大学小野間正巳・山崎保寿「未来を拓く力を育てるカリキュラムの構成に関する研究－教育環境学の視点を踏まえて－」日本学校教育学会第27回研究大会、2012年7月29日、於武蔵大学

(参考文献)

静岡大学教育学部附属浜松小学校『今、総合的な学習—経験に開く「統合」「教科」「生活創造」—』第一法規, 1999年10月

静岡大学教育学部附属浜松小学校『学校でカリキュラムをつくる—「子どもの夢」と「教師の願い」の調和をめざして—』静岡教育出版社, 2004年3月

静岡大学教育学部附属浜松小学校『共に学びを創る—学びの質が授業を変える—』教育出版, 2011年4月

(注)

(1) 附属浜松小学校における約20年間の実践研究のうち、「生活創造」の開発とその経緯については、下記論文で考察した。

小野間正巳・小澤直輝・大石泰三・山崎保寿・浮田佳昭「『生活創造』を基盤とした学校カリキュラムの構成に関する研究—附属浜松小学校における14年間の成果と課題—」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』No.19, 2011年3月, pp.131-140

(2) 附属浜松小学校におけるモジュール方式の導入とその成果については、下記論文で考察した。

山崎保寿・森下正巳・杉山友里「カリキュラム・マネジメントを活かしたモジュール方式時間割の提案と実践—附属浜松小学校における実践事例に基づいて—」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』No.18, pp.129-135

(3) 「感じる力」とは、身の回りの事象のよさや美しさを敏感に受け止める力である。子どもは、常に事象にからだを通してかかわることで、一人一人は様々なことを感じ取っている。学んでいる時に会える事象をどのように感じ取るかによって個の学びの深まり方が違ってくる。また、正しい感じ方や間違った感じ方があるのではなく、それを大切にすることにより事象のよさや美しさを敏感に感じるができる力である。

(4) 「表現する力」とは、感じたり、考えたりしたことを相手に伝わるように言語や体を使って表現する力である。子どもは、一人一人様々な方法で、学びを通して体が感じたままに表出したり、これまでの体験をもとに表したりする。こうした表しは、自らの経験をもとに自分なりの考え方として意味を持った表現へと発展する。

(5) 「見通す力」とは、疑問や課題を見つけ出し、よりの確に課題をつかみ、より計画的に問題解決をしようとする力である。子どもは、課題を見つけ出し解決するためには、何を解決していけばよいのか、どのように解決すればよいのかをつかみ、今までの経験に基づいた積み重ねから解決方法を見通すことができる。

(6) 「追究する力」とは、事象に積極的にかかわり、情報を集め・理解し、検討し、解決する力である。この力には、試したり調べたり、考えたり、判断したり、人・もの・こととかかわったり、振り返ったりすることが含まれている。

(7) 都築繁幸「設置までの経緯」『文部科学教育通信』No.293, 2012年6月, pp.15-17